

2020年(令和2年)9月23日(水曜日)



パソコン内に映る生徒たちとゲームをしながら英語を教える白石さん

### 電子版ジャーナル

新型コロナウイルスというマイナスの中から可能性を広げようと、教育関係者らの新たな挑戦が始まっている。(デジタル編集部 小林祐己)

「オンライン」。先生の元気が呼び掛けに、パソコンの画面の中で児童たちが手を振って笑顔で応える。分割された画面内の子どものちがいの場所はそれぞれの

家庭内。ビデオ会議システム「ズーム」を使ったNPO教育支援協会北海道(帯広)の講座「放課後イングリッシュ」のオンライン授業風景だ。

英語を教える先生は同協会専務理事の白石友柄さん。普段は自宅からも遠隔授業を行うが、この日は帯広市内の同協会本部事務所で、パソコンのカメラに向

# オンライン 利点もあり

## 学習支援 表情見ながら発音確認

ないが、オンラインでは発音をしつかりとチェックできるのも良いと話す。

「自分もやっていて楽しい。みんながどんな顔をしているか画面で確実に反応を見ながらできる」。画面内の児童たちも終始楽しそうに英語に親しんでいた。

「単にコロナだから在宅というだけでなく、受講者にとってメリットがあることやりながら気付いている」。外出自粛による緊急避難ではなく、教育支援の新たな形としてオンライン授業の可能性を感じている。

2月以降の学校休校で大学や高校を中心に導入された「オンライン」だが、現在では自宅での学習や居場所づくりの支援などがインターネットを通じて全国的に広がる。コロナ対策を超え、地域性や不登校などさまざまな理由で幅広い学習の機会が得られなかった子どもにも、知識や人との出合いの場を提供できることが広がり背景にある。

かった。カードを使った数字のゲームやじゃんけんなど楽しい遊びの要素を盛り込み、子ども一人ひとりの表情を確認しながら授業を進めていく。

「子どもがリラックスして受講できるし、何よりも集中する子どもの姿を親が見られるのがいい」とオンラインの利点を感じる白石さん。以前から使う「オフライン」会場の公民館では現在、マスク必着のため口元を見る発音の練習ができ

■詳細記事は勝毎電子版「電子版ジャーナル」に掲載

